

巻 頭 言

外科学講座統括責任者
小児・血管外科 大木隆生

外科再生ビジョン：統括責任者2年目を迎えて

私は2006年7月に小児・血管外科分野担当教授として米国より帰国し、2007年4月から外科学講座統括責任者を務めております。帰国して最初の1年はもっぱら血管外科のチームと診療実績づくりに奔走しましたが、徐々に統括責任者としての任に軸足を移して参りました。統括責任者として「外科医局員の総幸福度アップ」という最終目標達成のために「数は力なり、幸せなり」と「村社会への回帰」を軸とした「外科再生ビジョン」を提言し、その具体策も策定しました。その詳細は2008年2月に外科の皆さんにE-mailで配信しましたが、その全文を外科3教授の巻頭言の後に掲載しましたので、そちらを改めて読んでいただけましたら幸いです。



この構想の中で既に達成できたものもいくつかあります。以下の番号は「外科再生ビジョン」の番号と一致しています。1) これまでは人事権と予算権は当該分野担当教授が有していましたが、人事権を診療部長、医局長と統括責任者に移し、予算権は当該診療部長に移譲しました。統括責任者が全体のバランスを見つつ、より診療部の事情に明るい診療部長が裁量権を有するこの制度は効果的であったと確信しています。2) 労働条件や報酬改善ではなく、外科医療の魅力を若者に語りかけることや、きちんとしたレジデント制度を構築することなどの言わば正攻法で、入局者数を増やそうという目標ですが、2009年度は20名を超える外科レジデントが仲間入りしてくれる公算です。2006年までは入局者数一桁台が幾年も続いていたことを考えますと隔世の感があります。「外科学講座300人構想」に向け大きな一歩を踏み出せたと思います。3) 症例検討会と抄読会を人が集まりやすい月曜日と火曜日の早朝に移したのも良かったです。症例検討会の参加者人数はこれまでの平均10数名を大きく上回る約50名となり、大いに盛り上がるようになり、教育効果ばかりでなく、学生や研修医に我々の熱意が伝わるようになりました。また、いずれの会も、統括責任者が司会を務めるようにしましたが、厳しさの中にもユーモアがある会の運営を心掛けています。4), 5) 今後増えるであろう講師、准教授と医局員に備えて第二研究室を撤廃し、新たに講師席（6席）と、手狭になっていた会議室を大きくするという案も実行でき、大いに有効活用しています。6) 准教授、講師への昇格基準を森川、矢永教授と診療部長会議の皆さんのご協力を得ながら新たに策定しましたが、その中には部下の評価や、業績基準に満たない者でも特段の功労があった者には道が開けるという「慈恵らしさ」を盛り込むこともできました。この新たな基準により、新准教授4名と新講師6人が誕生しました。誠に喜ばしいことです。7, 8) レジデント制度では、トレーニングの質と量を担保するために、以前は派遣病院の数合わせに使われることもあったレジデントの人事を医局人事から切り離し、藤田准教授とともに批判に耐えうる教育システムを構築しました。9) スタッフの診療部間のコンバートルールも浸透しつつあります。10) 関連・派遣病院の見直しは、以上のように入局者数が激増していますので、当面の間派遣撤退の危機は回避できました。11, 10) 今年から始めた月例チェアマン・夕食会もこれまでに10回開催し、延べ356名の医局員、研修医、学生が参加してくれました。ここで多くの皆さんと語り、また時には貴重な助言もいただき

ました。統括責任者である限り続けたいと思います。

村社会にはいくつもの掟がありますが、その一つに「村を出て行く花嫁に最大限の嫁入り道具を持たせる」というものがあります。他学への転出が決まった川崎成郎と大平寛典（急いで学位も授与）を非常勤講師に昇格させ、メスを置き消化器内科医として第二の人生をスタートしようとしていた小林克敏に関しては退局前の6か月間を内視鏡部への派遣としました。熊谷外科の山崎東副院長急逝に際しては、直ちに医局員（前田剛志）を派遣しました。近年の外科学講座の最大の功労者である鈴木且磨先生が茨木で開業しますが、盛大な送別会を開催する以外に我々が鈴木先生のために出来ることがないことをもどかしく思っています。

今年から「外科再生ビジョン」の中に「外科学講座300人構想」とともに「外科教授輩出30人構想」も加えました。統括責任者を拝命してから主催した教授就任祝賀会の人数で数えますと、小林進、内田賢、吉田和彦、鈴木裕、柏木秀幸教授と5名に上りました。中でも柏木教授就任に関しましては、特段の想いと喜びを感じます。構想達成まであと25名です。

本院外科の診療実績は2006年には年間約30億円でしたが、今年は60億円を見込んでいます。前述したとおり、入局者数も激増しています。「トキメキと安らぎのある村社会」を柱とした「外科学再生ビジョン」は間違いなく軌道に乗りつつあります。一方で、90年代のバブル崩壊、ライブドア騒動、昨年のLehman Brother'sの破綻は、急激な発展は危うい事を示唆しています。これからの外科学講座運営においては、一過性の発展ではなく、長く継続可能で、健全な隆盛を目指したいと思います。また、医局員が増えましたので、今年から徐々に研究にも力を入れ、将来、診療部と能力を問わず志とハートのある医局員全員が学位と当該領域専門医を取得できる体制を整えたいと思います。